

『運動肢位の変化と肩関節周囲筋の筋活動について』

伏見岡本病院 リハビリテーション科

福島 秀晃

三浦 雄一郎

肩関節疾患症例の上肢挙上運動において、過剰な肩甲帯挙上(**shrug sign**)を認めることが多い。その要因は肩甲上腕関節の拘縮、腱板機能不全、肩甲帯機能不全など様々な機能障害が考えられる。セラピストはそれらの機能障害を的確に評価し、治療方針を導き出さなければいけない。肩関節の運動機能は挙上方向や挙上角度の変化に応じて刻一刻と変化する。例えるなら陸上競技の400mリレーのように巧みにバトンが受け継がれていくことで円滑な肩関節運動が成立される。従って、上肢挙上早期より **shrug sign** が認められる肩関節疾患症例へのリハビリテーションでは、機能障害に対するアプローチの他、この **shrug sign** を抑制し、肩関節の機能を改善（正常化）していく運動療法を提供する必要がある。

我々は、運動肢位を変化させた（坐位・背臥位・側臥位）時の上肢挙上（肩関節屈曲・外転）運動について筋電図学的に検討してきた。運動肢位の変化は上肢に生ずる力学的負荷（外的モーメント）が変化することから、選択的に肩関節周囲筋に抑制や促進が可能となる。

本セミナーでは運動肢位の変化によって肩関節周囲筋がどのように変化するのか筋電図データを整理し、肩関節疾患症例に対する具体的な運動療法について紹介する。